

『東方』三〇一号より

## 未知の領域に挑んだ 畢生の労作

植木久行(弘前大学)

唐代文学史研究のなかで最も遅れているのは、初唐文学である。十五年ほど前には、王勃と駱賓王しか参照すべき注釈書がなく、初唐文学の主流は、依然として齊梁風の華麗な集団文芸であり、典故を駆使した難解さのうえに抒情性に乏しい。かくして近体詩の形成過程や個々の詩人を扱う論文は発表されてきたが、約九十年間に及ぶ初唐文学の特徴とその魅力を、的確には把握しかねてきた。

こうしたなか、初唐期全体を視野に収めた大部の労作(六百頁強)が、昨年の十月に刊行された。北海道教育大学教授・高木重俊著『初唐文学論』がこれである。

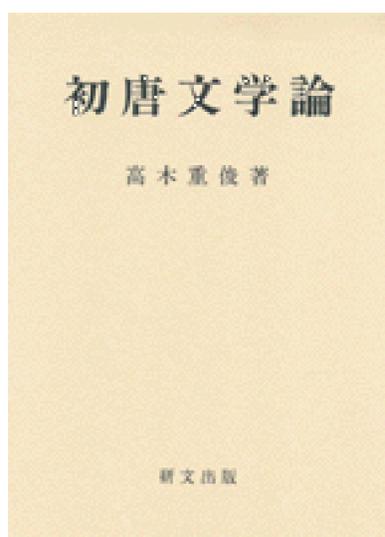
高木教授は、江戸後期松前藩の家老で、画家・漢詩人としても知られた蠣崎波響の研究でも知られるが、『初唐文学論』に収める論文は、一九七七年に始まり、昨年に到る三十年間にわたっており、基本資料を丹念に読み込む姿勢を貫いた畢生の労作である。参考文献の乏しい状況下で研究を開始し、初唐文人の文集を片端から読み進め、著者自ら「詩賦という韻文作品のみを論じて初唐文学を語る大方の傾向に与せず、つとめて表奏・疏啓・碑誌などの多様な散文作品をも取り込み、さらにその上に官人としての彼らの意識・生き方を重ね合わせて、総合的に初唐文人の個性的な像を構成しようと試みた」(あとがき)と語る意欲作である。ここには、「詩的想像力を含む文章表現能力と、そ

トップページにもどる

高木重俊著

『初唐文学論』

A5判・六〇八頁・研文出版・一一、五五〇円



の『文章』から看取され評価される学識や政策立案能力をよりどころとして、貢試を突破して官僚社会に入り、身の榮達をはかろうとした新興(知識・評者注)階層(序章)が、「新しい血」となって、新たな唐代文学を形成していった、とする時代認識に基づいている。

『初唐文学論』の構成は、以下のごとくである(索引・中文摘要も付す)。

序章 初唐という時代と、本書の概要

第一章 王績論

第一節 王績伝論——呂才「王無功文集序」をめぐる

第二節 王績の文学——寒郷の春

第二章 初唐四傑論

第一節 盧照隣の生涯と文学

第二章 駱賓王の生涯と文学  
第三節 王勃の生涯と文学  
第四節 楊炯の生涯と文学  
第五節 王勃「春思賦」と盧・駱の七言長篇詩  
第三章 陳子昂論

第一節 官人としての陳子昂——その上書を中心として  
第二節 陳子昂の文学——兼濟と独善の間で  
第四章 沈佺期・宋之問論

第一節 沈佺期の生涯と文学  
第二節 宋之問の生涯と文学  
第五章 初唐詩人を巡る人々

第一節 薛元超——寒俊を汲引した実力者  
第二節 裴行儉——文芸と器識の問題を中心に  
第六章 張説文学論

第一節 宮廷詩人としての張説  
第二節 欽州流謫詩群について  
第三節 先天中、洛下唱酬詩を巡って——初唐新興文人官僚の一側面

第四節 岳州小詩壇と幻の『岳陽集』  
第五節 張説の抒情——官途の旅情  
初唐文学論関連年表

紙幅の関係から、筆者にとって興味深かった点を少し述べてみたい。

第一章の王績論は、近年発見の五卷本に基づいて、「隱逸詩人」王績の伝記を考察し、出仕への強い意欲にもかかわらず、現実には太平の世から疎外された、時代遅れの隱士となった悲劇を語る。隱者は、そのレベルを判定する世俗に対して、常に信号を発しなければならぬ宿命を持ち、

▶ トップページにもどる

王績の文学は「会意・適意」の隱の日常を歌ったものであり、太平の隱者としての自画像を都市に届けるための活動であったという。隱者の文学が持つ本質を鮮やかにめぐり出している。

第二章 初唐四傑論は、地方の県令をつとめる寒門の出身で官途に恵まれなかつた盧照隣・駱賓王・王勃・楊炯の四人に対して、その生涯を詳しく考察して多彩な個性を探り、彼らがそれぞれ時流とは異なる独自の文学を形成して、(四人が一緒に活動したわけでもないのに)、生存中すでに四傑と総称された理由を考えたものである。

人生の転変を華麗に歌いあげて唐代の詩史に大きな影響を与えた、盧照隣「長安古意」と駱賓王「帝京篇」は、宮廷詩壇に参加して都の繁華を充分享受できない、いわば官僚人生の辺境に身を置く新興知識階層の「辺境の文学」として誕生し、律詩等の宮廷文芸とは正反対の骨太な大衆文芸であった。それは、獵官の意図をこめた、彼らの文学姿勢の表明であつたという。

王勃は免職されて蜀の地を彷徨していたとき、当地の官僚や僧侶・有力者との間に交遊の輪が作られ、求められて序や碑銘を多作した。それが王勃の生業でもあつたが、彼の文学は、宮廷文人・中央官僚を夢見る地方官との連帯と交遊のなかで成長して、おのずから宮廷文芸とは異なるものとなり、「他郷」の語、仮託や比喻の手法を駆使して、地方に身を置く彼らの共感を誘つたという。左遷された文人が起す影響と文学の変質を考察するものとして興味深い。

「楊炯の生涯と文学」は、日中を通して最初の本格的な文学論であり、すぐれた文章家(碑伝文学の作者)としての側面を見いだしている。

第三章は、陳子昂論。第一に官人、その後に詩人とする文学評価に基づいて、武則天に対する政治意見書を中心とする文章家としての彼を論じる。続いて、頼るべき門地を持たない新興官僚階層は、兼濟・独善という儒家的な処世哲学を行動の基準(理念)にすえ、栄達の夢を実現する抛り所としたことを指摘する。これは、古典的な処世哲学の新たな再生として注目される。

第四章は、沈期・宋之問論。二人は武則天朝・中宗朝に活躍した宮廷詩人として、「沈宋」と並称されるが、性格や文学はかなり異なる。沈期は、宮廷という至上の場に奉仕することを天職と心得た人物であり、人間の普遍的な問題につながりうる不幸な体験、下獄や流謫さえも、容易に語ることを放棄する「詞人」としての限界を明確に指摘する。

他方、宋之問は、詩の才能によって栄誉ある地位にしがみつこうとした典型的な文士・詞人であり、二度にわたる嶺南への左遷も結局、彼の文学に根本的な変化を生じさせなかった。これは、宋之問にとって、文学は自己の信念や主張を託すべきものではなかったためである、と。鋭い読み込みと評せよう。

第五章は、新興知識階層の好き理解者・後援者を取りあげた、ユニークな論考。

第六章は、初盛唐期を生きた、唐朝新興士人の最初にして最大の成功者(宰相・詩人・文章家・学者・将軍)、張説に対する多角的な研究。張説が六十七首の宮廷詩(応制詩・詔宴詩・扈從詩など)を残す、唐代随一の宮廷詩人であり、玄宗の開元中期、宮廷文壇の中心であったとする指摘は、注目に値する。ただ玄宗の宮廷詩壇は、当然、中宗朝のそれとは、詩形や題材の面で様相を異にしていた。

▶ トップページにもどる

交通(水運)の要衝、岳州(洞庭湖のほとり)に左遷された張説を中心とするローカル小詩壇の活動と、散逸した幻の『岳陽集』の研究も興味深い。その総集は、賈晋華『唐代集會總集与詩人群研究』(北京大学出版社)のなかにも見えない、独自の考察である。

以上は、興味深い説の一端にすぎない。『初唐文学論』は、基本資料を丹念に読み込んだ独創的な見解が随所にちりばめられており、啓発されるところが多い。ただ所収の論文は「基本的に発表時のまま」(序章)であるため、若干、近年の研究に対応できていないところもある。この点に関して、宋之問を取り上げて、少し言及してみたい。宋之問は、第一次の嶺南流謫後、約半年にして、ひそかに洛陽に逃げ帰ったとされる。これが従来通説であるが、近年見いだされた宋之問の「初承恩旨、言放歸舟」詩によって、じつは恩赦に遇って北帰したのだ、とする説が提出され、今後充分検討されなければならない。宋之問を「辞業」と「官成」の両立をひたすら求める典型的な文人官僚と見なすが、その言葉が基づく「辞業備而官成、名声高而命薄」(『祭杜学士審言文』)の語は、辞を鮮、名を多に作る『文苑英華』に従って、「業備りて官成るもの鮮く、声高くして命薄きもの多し」と読むべきであろう(陶敏ほか『沈期宋之問集校注』〔中華書局〕参照)。

こうした検討課題を細部に残しながらも、本書によって初唐文学の多様な様相が明らかになった。初唐文学研究の水準を一挙に飛躍させた本書は、中国の文学・思想・歴史に関心を持つ人々の知的関心に充分応える好著であり、評者は自信を持って本書を推薦したく思う。